Osaka University Knowledge Archive

Title	The German Code in Thackeray's Major Works
Author(s)	市橋, 孝道
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49426
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【５】

氏　　名	市　橋　孝　道（いち　はし　たか　みち）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２４２８　号
学位授与年月日	平成20年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	The German Code in Thackeray's Major Works （サッカレーの主要作品にみられるドイツ表象の意義について）
論文審査委員	（主査） 教　授　玉井　　暲 （副査） 教　授　森岡　裕一　　教　授　服部　典之　　准教授　片渕　悦久

論文内容の要旨

本論文は、１９世紀イギリス・ヴィクトリア朝時代の小説家ウィリアム・メークピース・サッカレー（１８１１－６３）を取り上げ、その主要作品においてドイツ的な要素がいかに表象されているかを探り、その意味を考察した研究である。論文は、序論、本論７章、結論、および注、参考文献から構成されており、全体で英文にて１７２ページ、和文４００字詰め原稿用紙に換算しておよそ４５５枚からなる論文である。

まず序論では、サッカレーは、同時代の作家に比べて国際的経験が豊富で、ドイツ的なものにも精通していたため、その知識と経験を活かして、みずからの小説作品の中にドイツの文学、文化、歴史、哲学などに関する要素を多量に描き込んでいる事実を指摘したあと、このドイツ的なるものが彼の小説空間においていわば「ドイツ的暗号」（the German code）として機能しているありようを解明することが、サッカレー文学の研究にとって重要であると主張する。

第１章では、サッカレーが小説家としての地歩を固めるのに重要であった初期小説『バリー・リンドン』（１８４４）を取り上げ、主人公バリーをめぐる悪漢小説的側面を重視する従来の見方を排して、この小説空間には、物語の舞台としてドイツ的なるものが２／３を占めているという特徴に注目をし、「ジェントルマン」という典型的に英国的なものがドイツ的なものと対置される意味を考察する。

第２章では、サッカレーの最高傑作と評価されている『虚栄の市』（１８４６－４７）を論の対象にして、この小説空間にドイツ社会「プンペルニッケル」が配置されている意味を重視し、この叙述の中に、ただ単に虚栄に囚われた英国中産階級を風刺するという意図以上に、ドイツ的設定を背景に人間の精神的成長を描こうとする、より普遍的なモチーフが読み込めるのではないかと主張する。

第３章では、『ペンデニス』（１８４８－５０）を教養小説（ビルドゥングスロマン）として読むことのできる根拠を考察する。主人公アーサー・ペンデニスの成長・発展を検証するに当たり、論者は、教養小説的側面を問題視する従来の解釈を否定して、ゲーテの『ヴ

ィルヘルム・マイスターの修行時代』との文学的コンテクストを重視し、サッカレーの主人公にはゲーテより学んだ独自の「ビルドゥング」観が「洞察力の育成」というテーマをめぐって確認できると述べる。

第４章では、『ニューカム家の人々』（１８５３－５５）を取り上げ、ドイツ旅行の挿話に注目をし、ヴィクトリア朝のイギリス社会に紹介されたドイツのフレーベル主義幼稚園の教育思想との文化的コンテクストを探って、この小説に潜在する、子供の自発性を尊重するという教訓的意味の掘り起こしを行う。

第５章では、前章で見たサッカレーの教育思想を、子供向けのファンタジー小説と考えられていた『ばらと指輪』（１８５４）の読みを通して検証し、この小説をメッセージ性の強い成人向けの物語として読むことのできる可能性を探っている。

第６章は、『虚栄の市』とならぶサッカレーの代表作『ヘンリー・エズモンド』（１８５２）を取り上げ、登場人物の名前とドイツ舞台の導入という面から、初期小説『バリー・リンドン』との比較研究を行うことにより、この小説およびサッカレーの小説全体に見られる「二人の主人公設定」という特徴の意味を考察する。

第７章は、晩年の大作『ヴァージニアの人々』（１８５７－５９）を取り上げ、従来の批評家は双子の主人公達がアメリカの独立戦争に巻き込まれる叙述に注意を奪われ、イギリス社会の描出という面が閑却される傾向にあったことを批判し、じつは、このイギリス的なものをドイツ的なものとの対比において描くのが、著者の真の意図であったことを、この小説の構造と細部描写を踏まえて考察する。

結論では、サッカレーにおいては、晩年になってドイツ的なるものに少し距離を置く傾向が現れたことにも触れながら、しかしこの Germanism がサッカレーの小説空間において重要な機能を果たしたことには変わりはないと、改めて自説を強調して論を終える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、１９世紀イギリスのヴィクトリア朝小説を代表するウィリアム・メークピース・サッカレーの主要な長編小説を取り上げ、それぞれの作品の小説空間において、文学、文化、風俗、歴史、思想・哲学などにおける「ドイツ的なるもの」がいかに表象されているかを執拗に検証し、その意味を考察した意欲的な研究である。サッカレーの時代には、ドイツの思想・哲学は確かにイギリスの知的世界に浸透していたので、哲学の分野ではそうしたドイツ的なるものとの関連性の研究はよく見られるにしても、本論におけるような、サッカレー文学におけるドイツ的コンテクストを探る研究は、極めて斬新であると言えよう。この研究の意欲性および先駆性は高く評価されねばならない。特に、従来サッカレー小説について指摘されていたイギリス社会・文化に対する風刺性については、このドイツ的なるものとの対比において検証されることにより、サッカレーの風刺精神のもつポジティヴな面、メーセージ性などを含む多面性・多層性が明らかになったことは、興味深いことである。また、サッカレーの広大な小説世界に対してドイツ的なるものの表象の検証という統一的視点を導入することにより、その全体像を提示できたことは、サッカレー小説のみならず、ヴィクトリア朝小説全体の研究にとっても大きな貢献と言えよう。

ただし、本論文において問題がないわけではない。全体として、ドイツ的なるものの表象への検証がやや表面的に流れることがあって、取り上げた個々の小説テクストそれ自体の分析においてより一層掘り下げた議論を見てみたいという印象が残る。また、ドイツ的要素をもっぱら物語内容の次元で捉えており、その特質が小説の詩学とどのように関わるのか、もう少し詳しく論じる必要があろう。

しかし、これらの点は望蜀のごときものであって、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。